

ワッツ集客難で降格危機

26年からの新リーグ 3部相当に

■今季のホーム戦入場者数

節	開催日	会場	入場者数(人)
2	10月12日(土)	カクヒログループ スーパーアリーナ (青森市)	1,613
	13日(日)		2,003
4	23日(水)	カクヒログループ スーパーアリーナ	1,105
5	26日(土)	むつマエダアリーナ (むつ市)	835
	27日(日)		952
7	11月9日(土)	カクヒログループ スーパーアリーナ	1,160
8	10日(日)		1,371
	16日(土)	カクヒログループ スーパーアリーナ	1,291
11	17日(日)		1,734
	12月7日(土)	伊藤鉦業アリーナ つがる(つがる市)	1,362
14	8日(日)		1,514
	21日(土)	県武道館(弘前市)	1,435
17	22日(日)		1,648
	1月11日(土)	カクヒログループ スーパーアリーナ	1,149
18	12日(日)		1,429
	25日(土)	カクヒログループ スーパーアリーナ	1,269
	26日(日)		1,641

※着色部分は入場者数1500人超

■今後のホーム戦日程

節	開催日	対戦相手	会場
21	2月8日(土)	山形ワイヴァンズ カクヒログループ スーパーアリーナ	
	9日(日)		
22	15日(土)	福島ファイヤーボンズ カクヒログループ スーパーアリーナ	
	16日(日)		
24	3月1日(土)	熊本ヴォルターズ 八戸市東体育館	
	2日(日)		
25	8日(土)	バンビシャス奈良 県武道館	
	9日(日)		
28	26日(水)	富山グラウジーズ カクヒログループ スーパーアリーナ	
30	4月5日(土)	アルティリーリ千葉 カクヒログループ スーパーアリーナ	
	6日(日)		
32	19日(土)	福島ファイヤーボンズ カクヒログループ スーパーアリーナ	
	20日(日)		

経済に大きな損失も

13残り 平均入場者1653人 必須

プロバスケットボール・りそなB2リーグの青森ワッツが今季、集客難で事実上の「降格危機」にひんしている。ホーム戦17試合を終えて平均入場者数は1383人。このまま推移して今季を終えれば、クラブの事業規模が審査対象に加わる2026年からの新リーグで3部相当の「Bリーグ・ネクスト(Bネクスト)」となる。新リーグで1部相当の「Bプレミア」を筆頭に、上位力テゴリーはこれまで資金力

で不利とされてきた地方クラブの参入が相次ぐ。各クラブが経営基盤を整えたことで「地方創生リーグ」として規模と市場が急成長を見せ、ワッツが上位力テゴリーへの初年度参入を逃せば、本県経済にとって大きな機会損失となる可能性をほらむ。ワッツが目指す2部相当「Bワン」の参入条件を満たすためには、残り13試合で平均入場者数1653人の達成が必須だ。(田中康貴、中村大樹)【関連記事3面】

現行のBリーグはB1、B2合わせて32都道府県38クラブから成る。昨季はクラブ合計営業収入が約552億円(前年比33.0%増)、入場者数は約45.2万人(同39.9%増)と過去最高を更新。ワールドカップやパリ五輪日本代表の活躍、河村勇輝選手の米プロバスケットボール協会(NBA)挑戦といった話題を背景にバスケット人気が高まっており、女性や20・40代の若い世代を中心にファンが増加している。1月には世界最高峰のNBAと戦略的提携の基本合意を締結。欧州や中国を凌ぎ、NBAに次ぐ世界第2位のリーグを目指している。

事業の成長加速化の一端を担ったのが「B・革新」と銘打って26年秋に移行する新リーグ制度だ。競技成績による自動昇降格を廃止し、経営規模に応じて力テゴリーを分けるもので、各クラブの経営健全化と戦力均衡を狙いとす。これまで赤字経営や債務超過の要因となっていた選手年俸の総額に制限を設け、ドラフト(新人選択)制度を導入するなどして資本力のある大都市クラブに戦力が偏らないよう調整。アリーナの活用を軸に経営努力で収益性を高めることができ、地方であっても資産価値の高

いクラブが増えることを期し、Bリーグの島田慎二チエアマンは同改革の目指す先を「地方創生リーグ」とうたう。

Bプレミアに参入が決まったクラブはリーグの当初想定数を超える26クラブで、東北地方唯一の政令指定都市である仙台はもとより、秋田、信州、富山、島根、長崎、佐賀といった地方クラブも名を連ねる。10月にライセンス審査が行われるBワンは、期間中の平均入場者数1500人以上の達成で仮入会が認められ、東北ではB2の山形、福島、B3の岩手が基準を満たす。

ワッツはBワン参入条件のクラブ年間売上高4億円の達成を見込んでおり、3000人収容可能なアリーナも確保済みであるものの、このまま入場者数が伸び悩めば26・27シーズンからBネクストとなる。現行のB1、B2クラブの大半がBプレミア、Bワン参入へ向かう中、相対的に一歩後退することになる。後のシーズンで基準を達成すればBワンへの入会は可能だ

が、事業規模が小さく、かつ参加クラブ数も少なくなる見込みのBネクストでさらなる集客を図らねばならなくなり、ワッツ広報担当者は「初年度参入を逃すと非常に厳しい」と語る。

新たなBリーグには、地方のクラブであっても投資する価値を生み出せるスポーツ・エンターテインメント産業としての期待が高まっている。クラブに関わるステークホルダー(利害関係者)のつながりから新たなビジネスチャンスや雇用が生まれる可能性もあり、若年層や女性の県外流出が深刻な本県においても将来性のある市場となり得る。

昨季の経営危機を乗り越えたワッツについて、ホーム最終戦に足を運んだ島田チエアマンは「奇跡」と表現し「チームがこの地に必要だと思っっている方が多く、そのエネルギーの強さがいろんなものを動かした」と述べた。地方創生を目指すプロスポーツビジネスの大きな変革において、県民クラブとしてのワッツの存在価値が今、改めて問われている。